

日本における李退溪研究と現代的意義について

正 田 啓 佑

(一)

李退溪（名は滉、字は景浩）は、李氏朝鮮の燕山君の七年（1501）に、慶向北道安東郡礼安県温溪洞で生まれ、宣祖の三年（1570）に亡くなっているのであるが、これは我が国では室町時代の末期に当っており、退溪が信奉した朱子（1130―1200）が亡くなって三百年後に生れたということである。

李退溪の生きた時代は、中国では明の時代で、王陽明が亡くなった年は、退溪二十八歳に当るのである。

この李退溪の思想がどのようにして日本に入ってきて、どのように影響を与えたかを、これまでの研究成果をまとめることを通じて、二十一世紀に向うこれからの世の中に、李退溪の思想の裨益するものがあるとすれば、それはどのようなものであるかを究めようとするものである。

李退溪が生きた時代の日本と朝鮮との関係は、足利将軍が、日本国王として朝鮮王国に使節を送り、朝鮮からも同様に使節が派遣された。室町幕府は、約百六十年間に、相互に六十余回ずつの使節が行き来しているように、善隣友好の外交関係にあり、貿易も行なわれていたが、豊臣秀吉の野望による、文禄・慶長の役（韓国では、壬辰・丁酉の倭乱という。）のために関係は破られた。この戦争の中で捕らえられ、日本に連行された姜沆（1567―1618）によって、朱子学が藤原惺窩に伝えられることになった。この文禄の役（1592）の2年前の天正十八年、李退溪の高弟金誠一（号、鶴峯。1538―1593）が使節として来日している。この使節の接

待役として藤原惺窩が応待して金鶴峯に会っているのも、その時、鶴峯の口から師の李退溪のことが伝えられたのではないかと想像される。^{*1} 残念なことに、この時の使節と秀吉との会談が不調に終わったため、文禄の役となったが、この間に多数の朝鮮版の書籍が舶載され、活字印刷術や製本術も伝わった。

李退溪の書籍で、最初に我が国の記録に現れるのは、『天命図説』（鄭秋巒・李退溪共著）で乙巳（慶長十年・1605）の年に、藤原惺窩が弟子の林羅山に与えた書簡（『惺窩文集』巻十一）に記載されており、惺窩が羅山から借りて読んでいる。

羅山は後に『天命図説』の跋文（元和辛酉・1605）を書いているが、そこで次のように述べている。

余、此の本を家蔵すること久し。一日、惺齋（惺窩のこと）に視す。惺齋曰く、四端、理に出で、七情、氣に出づ。此の説、是なり。諸を困知記に云ふ所に比すれば、即ち此れ彼より善なりと為すと。

（『林羅山文集』巻五十）

ここで惺窩は、李退溪の四端七情説の正しさと、羅整庵の『困知記』の説よりも良いと評価しているのである。

林羅山は膨大な量の本を読んでおり、中に朝鮮儒学関係の本も多数あるが、李退溪に関するものは、先に挙げた

『天命図説』と『朱子書節要』であり、羅山の言説からすると、李退溪を尊敬はしたが、影響を受けたと指摘しうる点は少ないと阿部吉雄先生は述べる。^{*2}

それなら、李退溪の影響を最も大きく受けた人は誰かというところ、それは山崎闇斎である。闇斎の李退溪に関する研究はすでに数多くなされているが、^{*3} ここに、闇斎が李退溪を高く評価している言葉を二、三挙げると、

朱書を抄出する者多きも、未だ退溪の『（朱子書）

節要』に若く者を見ず、朱子行状、退溪の輯注もまた考索尤も精し。
（『文会筆録』十七）

『朱子書節要』、李退溪の平生の精力、尽く此に在り。
『退溪文集』全四十九巻、余、これを閲す。実に朝鮮の一人なり。
（同前書、二十）

近ごろ李退溪の『自省録』を看るに、これを論ずること詳かなり。是の論を得てこれを反復し、以て此の規（白鹿洞学規）の規為る所以を知る者有り。……然りと雖も、退溪の若き、朝鮮数百載の後に生れ、而も洞遊面命に異なる無ければ、則ち我もまた感発して興起すべしと云ふ。
（『白鹿洞学規集註序』）

というように、闇斎の文集（『文会筆録』）ばかりでなく、闇斎の著書の序文や跋文にも、退溪の言説を引き合いに出して述べている。^{*4} そこで闇斎が、李退溪の著書のうち何を

最も多く引用しているかを、闇斎の主著である『文会筆録』より拾うと、『李退溪文集』41条、『自省録』24条、『朱子書節要』7条が上位三種である。

山田思叔の「山崎闇斎年譜」(『日本道学淵源録』巻一所収)には、闇斎の言葉として、

(闇斎) 又曰く、朱夫子の後、道を知る者は薛文清、丘瓊山、李退溪なり。(薛) 文清の見識の高き(丘) 文莊の博文の富める、朱門の後、其の右に出る者有ること無し。其の後、特り李退溪のみなり。蓋し退溪の平生の精力、尽く『朱子書節要』に在り。以て其の醇なるを觀るべし。と。

同様の言葉は、山崎闇斎の「小伝」(『日本道学淵源録』巻一所収)にもある。

師の闇斎が李退溪を尊信するのを受けて、崎門(山崎闇斎学派)では李退溪が尊敬された。崎門の三傑の一人、佐藤直方もその例にもれず李退溪を尊信した。その直方は師の闇斎について「朝鮮李退溪……近世独り山崎敬義先生、其の書(朱子書節要)を読み、其の人を尊び、其の学を講ず」(『韞藏録』討論筆記)と述べている。この佐藤直方の李退溪に対しての評価は、『韞藏録』(巻四)の「中庸書節」にあるが、筆者もすでに「李退溪と佐藤直方の敬説について」として発表した中に述べたように、道学の伝統を伝え

日本における李退溪研究と現代的意義について

るものとして直方は、

周・程・張・朱・其の統を接ぐ。而して道学また世に明らかなり。朱門の黄勉斎・蔡九峯、実に其の伝を得るも、其の余、蓋し聞くなし。元明の間、儒を以て名づけらるる者、枚挙すべからず。其の聖学門牆を窺ふに至れば、則ち方孝孺・薛文清わづかにこの二人を見るのみ。(それに対して) 朝鮮の李退溪は、東夷の産にして中国の道を悦び、孔孟を尊び、程朱を宗としてその学識の造る所、大いに元明の儔に非ず。

(同前書 卷二)

と述べて、李退溪が道学の伝統を継ぐ者として、その学識の深さと純粹さにおいて、中国の元代や明代の学者の比ではないと言うのである。^{*7}

三傑のもう一人、浅見綱斎は、主著『靖献遺言講義』の中で、「朱子行状」について言及して、「李氏(退溪)ノ学、嗚呼篤シ。嗚呼深キカナ」^{*8}言い、「李退溪ハ、ウタガヒモナク正脈ヲエラレタサフナ」と述べていることから、綱斎の考えは分る。しかし綱斎は、中国夷狄論において李退溪を批判している面もある。^{*9}

三傑の最後の一人、三宅尚斎については、海老田輝巳教授の研究があり、李退溪と三宅尚斎、及びその門下留守希斎との関係が論じられている。^{*10}

佐藤直方の門に学んだ稲葉迂斎（1684—1760）、彼の門下の村士玉水（1729—1776）は『李退溪書抄』を編纂している。^{*11}この書は、『李退溪先生文集』全五十九巻から、十巻五百四十五通の書簡を抄出したもので、この書の序文は寛政の三博士の一人、古賀精里（1750—1817）が文化八年（1811）に書き、信古堂より刊行しているが、その序に、

余、嘗て朝鮮の醇儒に退溪李先生なる者有るを聞き、其の著はす所の書を購入ひ求め、独り邦版の『自省録』、『朱子書節要』、『聖学十図』を得。頃歳、始めて先生の文集の謄本を得たり。これを読むに益々其の学の純にして、功を用ふること親切なるを歎ず。真に師として仰ぐべし。……今茲、寒泉岡田君、（村士）玉水翁の纂する所の『李退溪書抄』を以て梓に授けんことを謀り、序を余に問ふ。辞するに不敏を以てするも、允さるを獲ず。是の書の行はるるは、固より余の志なり。則ち敢て終に辞せず。これに序して曰く、朱子、羣賢を集めて大成し、而して斯道の学、日中の天の如し。後の学者、これを篤く信ずるに在るを要するのみ。これを篤く信ずれば、則ち知は必ず致し、行は必ず力む。而して必ず得る所有りて、自ら佗岐の惑を容れざらん。

「刻李退溪書抄序」（『精里二集抄』卷一）

と述べて、李退溪の学問について、その純粹さと努力の着

実さを読みとって、真に師として仰ぐべき人であるとしており、この書の序文を書くには自分は不敏と言いながら、この書の刊行は自分の志であるとして書いているのである。この書を編纂した村士玉水の門下生が岡田寒泉で、本書の跋文を書いているのだが、彼は柴野栗山、尾藤二洲とともに、寛政の三博士として幕府の文教行政面で活躍していた。しかし寒泉が常陸の代官になって去った後に就任したのが古賀精里である。

以上、李退溪を評価した崎門関係の人々について述べた。

(二)

次に朝鮮に近い九州の儒者のうち、李退溪を評価した人について述べたい。

福岡の儒者貝原益軒（1630—1714）は、若い頃、松永尺五、山崎闇斎、木下順庵に学んで朱子学を奉じており、その上広い学問的関心を抱いていたことから、当然朝鮮の儒学にも関心を抱いていて、李退溪についてもその書を読んでいる。しかし退溪の学問は、純粹に朱子学を守る立場であり、厳しい体認を旨とするものであったから、益軒の学風とは異っていた。その上益軒は、晩年朱子学に疑問を抱き、『大疑録』（正徳四年・1714）を書いたが、その中で次のよう

に述べている。

朱子曰く、「身に死生ありて、性に死生無し」と。

李退溪の『自省録』に亦曰く、「氣に死生あり、理に死生無し」と。夫れ朱子の賢、李氏の学、其の説く所差（たが）ひあるを容れず。然れども予の昏愚は、此等の説に於いて未だ通曉すること能はず。故に此に於て姑く臆説を述べ、疑ふ所左の如し。以て識者の開始を俟たん。

この『大疑録』を書いた2ヶ月後に、益軒は八十五歳で亡くなっているのだが、益軒は朱子学に疑問を抱くとともに、退溪の学問に対しても理解を示していないのである。

この益軒の弟子竹田春庵（1661―1745）は、天和二年（1681）と正徳元年（1711）に來日した朝鮮通信使に会って、筆談・唱酬している。その天和二年の時、製述官の李東郭との問答に、春庵は、

僕嘗て退溪先生の書を読み、其の粹美の真儒たることを知り、敬服尤も深し。其の他、（権）陽村・（李）晦斎等の諸先生の如きも、亦已に其の書を読み、其の人と為りを知る。^{*12}

と言って、春庵は李退溪に敬服しているのである。

熊本の実学思想家大塚退野（1677―1750）も李退溪を高く評価した。退野は初号は蹇斎、後に孚斎、代々細川侯に仕え、

日本における李退溪研究と現代的意義について

致仕後に退野と号した人である。彼の言葉に、

吾、二十八より程朱の学に志す。其の前、陽明の学を信じて良知を見るが如くにあり。然れども聖經に引合て平易ならず、竊に疑を起す。然して『自省録』を読み、内に程朱の意味を曉り、始めて志し候なり。

（『退野語録』）

大塚退野が程朱学を志すのに、『自省録』を読むことによって始まったことは、中瀬柯亭に与えた書にも、

『自省録』一看^{（かま）}仕り候。久々にてよみ申し候。ますます退溪の至り、測るべからずと存じ奉り候。此の人なくんば、紫陽（朱子）の微意不明にして、俗学となりおわり候事と存じ奉り候。

とあり、その結果、朱子の真意を把握するために『朱子書節要』を熟読することになったことを次のように述べる。

余、壯歳より退溪先生の言に本づき、『朱子書節要』を熟読し、窃かに朱子の為す所、是くの如き者を窺い得てこれを記す。終に胸臆に藏し、信じて斯に従事すること幾んど、四十年。
（『孚斎在稿』一）

學術、多端に分れ、後学迷ひて従事す。実に嘆くべし。己に在りて差はざらんと欲せば、則ち『朱子書節要』を読むに若く莫し。此の故に退溪先生の憂学の志、すべて此に在り。信ずべし、敬すべし。
（同前三）

この大塚退野が李退溪の書により、朱子学を真に理解し、深めていったことは、楠本正継先生の研究に詳しく説かれ、^{*14} それを受けて岡田武彦先生も退野の学が、平野深淵、森省斎に継がれ、そして楠本碩水へ繋がったと述べられる。^{*15}

一方、大塚退野とともに肥後の実学の指導者であった藪慎庵（1689—1744）も退溪について次のように述べている。

退溪李先生、学は紫陽を宗とす。……其の節する

所の『朱子書節要』二十卷、……吾友孚齋翁（大塚

退野）一たびこれを読み、乃ち其の親切なるを知り、以て尊信すること神明なるが如くに至り、遂に一本を謄写す。翁（退野）毎に予に謂ひて曰く、「此の書、特だ紫陽の閩奥を窺ふのみならず、殆んど撰者の造詣の深きを知る。」（『慎庵遺稿』巻六）

この藪慎庵は、次男の藪孤山（1735—1802）を退野の下で学ばせている。そこで孤山も、師退野の李退溪に対する尊崇ぶりを目の当りにしたので、弟子の赤崎海門（名、貞幹。^{*16} 1756—1819）への書の中で次のように述べている。

朱子の学、本朝に行はるるや久し。而して吾が肥（肥後）僻を以て西海に在り、未だ其の人有所らず。大塚先生有り、奮然興起し、乃ち始めて専ら朱子の学に力む。既に朝鮮退溪李氏の選ぶ所の『朱子書節要』を得てこれを読み、超然として心に得る有り。喜びて曰

く、「是れ朱子の心を獲し者なり」と。遂に其の書を尊信すること神明の如しと云ふ。先子（父の慎庵）繼いで興り、大塚先生に兄事す。……故に大塚先生の言に曰く、「勉齋の朱子を状するは、『節要』の朱子を書するに如かざるなり」と。朱子もまた曰く、「百世の下、紫陽の緒を継ぐ者は、退溪其の人なり。二君の李氏を称するや此くの如し。其れ必ず見る所有らん。

（「送赤彦齡序」『孤山遺稿』巻九）

退溪の『朱子書節要』が、いかに朱子の精神を表わしているか、黄勉齋の『朱子行状』よりも優れているとする大塚退野、そして朱子を継ぐ者こそ李退溪であるとする藪慎庵、この二人の退溪に対する称賛を、孤山は弟子海門に語る中に、孤山の尊信ぶりも伺えるのである。

大塚退野の学問を慕った人に、他に横井小楠や元田東野（永孚）がいたことについては、先にあげた楠本、阿部、岡田の三先生の著書（論文）に述べられている。また崎門三傑の一人浅見綱斎の学統の学者須賀玉潤や、同じく三傑の一人、三宅尚斎の学統の学者上月鶴洲（専庵）の李退溪に関することは、松田甲氏の研究にある。^{*18} この章を締めくくるに当って、大塚退野の思想学問を受け継いで学を成した楠本碩水（1832—1916）の記事と詩をあげておきたい。

先生（碩水）、後來退溪を信ずること益々篤く、以

て朱子後の一人と為す。明治丙午の春、退溪言行録及び年譜を得てこれを読み、毎に曰ふ、陸稼書は張楊園に及ばず、楊園は退溪に及ばず。薛（敬軒）・胡（敬齋）もまた及ばざるなりと。（『碩水先生余稿』）

明治丙午とは三十九年（1906）で、碩水七十五歳の晩年である。この文中に述べている李退溪の『言行録』を得た時に、喜んで次の詩を詠んでいる。

平生最慕退溪風 平生最も慕ふ、退溪の風

學術純然自不同 學術純然たり、自ら同じからず

珍重一編言行錄 珍重す、一編の言行録

使人仰讚感無窮 人をして仰讚窮まり無きを感じしむ

(三)

これまで李退溪の思想が、どのような形で日本に入ってきて、何がどのように評価されたかを、崎門学派の人々と九州の儒者を中心に述べてきたが、次に近年の日本における李退溪研究について、出版された専著を通じてその内容を見ていきたい。

まず李退溪についてまとまった書の最初のものである松田甲著の『日鮮史話』^{*19}を挙げたい。本書の第3巻の第6編は李退溪の特集で、次の6篇から成っている。

1. 陶山書院の追憶（昭和4年8月稿）
2. 自省録と朱子書節要（同年10月稿）
3. 日本にて翻刻せる退溪の著書（同右）
4. 村士玉水の李退溪書抄（同右）
5. 日本朱子学者の李退溪観（同11月稿）
6. 李退溪の学流に顧みて（同5年2月稿）

これらの論文については、前術の文章中に参考として引用したので、注記から内容はおおよそは分ることと思う。特に「日本朱子学者の李退溪観」に数多くの学者の影響が論じられている。なおこの他に本書第一巻第一編に先に述べた赤崎海門についての「李退溪の学説を研修せる薩摩の大儒赤崎海門」（大正十五年五月稿）がある。赤崎海門（1742—1805）は、藪孤山門下で、孤山を通して大塚退野の尊崇する李退溪の学問を学んだ。薩摩藩の藩校造士館の教授になり、昌平黌に招聘されるように、彼の学力は高く評価されてもいる人である。本篇をはじめとして松田氏の著書には、詳しく論じてはいないものもあるが、後の研究者が論じる大半の人が登場している。

戦後、李退溪研究の第一に上げねばならないのは阿部吉雄先生の研究である。戦前に、すでに『李退溪』^{*20}という著書で李退溪の生涯を著されていたが、戦後、奉職していた京城帝国大学が廃校になるとともに、ソウルから東京へ引

き揚げられて後、第一高等学校から東京大学へと奉職され、東京大学教養学部人文学科紀要に発表された李退溪関係の論文を中心にまとめられ、昭和40年3月に、東京大学出版会から刊行されたのが大著『日本朱子学と朝鮮』である。本書は李退溪の専著ではないが、大半は李退溪に関係するものである。朱子学が李退溪の書を通じて、藤原惺窩や林羅山に読まれて影響したこと、また李退溪を最も尊敬した山崎闇斎について、各方面に関する研究。そして日本の朱子学史上における李退溪についてを、李退溪の著書の江戸時代に刊行された和刻本から、闇斎の門下である崎門学派の人々への影響に至るまでが論じられている。

この書の後、資料として重要な『日本刻版李退溪全集』を編され、解題を付して、一九七五年十一月に、韓国の李退溪研究会から刊行された。この全集は、江戸時代、日本で刻された李退溪の著作、編注等の書である『朱子書節要』『延平答問』『李退溪書抄』『天命図説』『聖学十図並戊辰封事』『易学啓蒙伝疑』『自省録』『朱子行状輯注』『李退溪西銘（考證）講義』『七先生遺像贊』『心経附註』の11種を収めている。

本書刊行後、李退溪の生涯と生活態度、前著の11種の書の解説、それに『日本朱子学と朝鮮』刊行以後に発表された李退溪に関する論考をまとめて、『李退溪——その行動

と思想——』（昭和五十二年九月、評論社）として刊行された。またこの同じ年に刊行された『朝鮮の朱子学・日本の朱子学（上）』（『朱子学大系』第13巻、明德出版社）は、先生の監修の下にあり、李退溪は先生が担当し、李退溪の解説と退溪の文5篇を書き下し文とし、これに要約と注を付している。ここにあげた4書に見られるように、李退溪の研究をする人は、何はともあれ、これらの書を踏まえることからは始めなければならない。^{*21}

九州の李退溪研究会の先駆者である友枝龍太郎先生は、『朱子の思想形成』（春秋社刊）という大著のある朱子学研究の泰斗であり、朱子学の研究から李退溪の研究へと、領域が拡大していった結果、『李退溪——その生涯と思想』（昭和60年8月、韓国退溪学研究院刊。日本では東洋書院刊）を出版された。本書は阿部先生の李退溪と日本への影響や受容関係から論じられているのとは違い、李退溪その人とその思想に、とくに理気論、性情論について詳しく論じており、また存養省察・格物窮理にも及んでいるのである。本書の第一章の「退溪の生涯」を除いて、第二章以下の思想を論じた部分は、すべて退溪学国際会議、朝鮮朱子学国際会議、東洋国際学術会議等の国際会議で発表したものをもとに補正して収載したものである。

この書と同年に出版されたものに高橋進著『李退溪と敬

の哲学』（昭和60年9月、東洋書院）がある。本書も、友枝先生の書と同じように、国外における退溪学や韓国学のいろいろな国際会議での研究発表を収めたものであり、李退溪その人と彼の思想を分析し究明したものであるが、前書と大いに異にする点は、李退溪の政治的活動の方面から思想研究を中心に行っている面のあることであり、また『天命図説』や『聖学十図』などの根底に「敬」の思想を見出して、倫理的な面での究明をしていることである。

この他にも注にとり上げているような論文があるが、それらの外に韓国の退溪学会の機関誌に載せられている日本人の研究について述べておきたい。

韓国においての李退溪は、千ウオン札の肖像となった人物であり、第一の思想家である。ソウルには社団法人「退溪学研究院」があって、機関誌『退溪学報』を刊行、一九九八年六月に第98輯を出しているので、すでに百号を越えているはず。^{*22} また釜山には退溪学釜山研究院（一時「韓国退溪学研究院」と称したが、二〇〇〇年元に復す）^{*23}があり、本年第十三回の国際学会を開催し、『退溪学論叢』^{*24}も第五輯を数えている。李退溪の生地で安東大学には退溪学研究所があって『退溪学』^{*24}を刊行している。このような研究機関に、日本からも何人かの人が参加し、研究論文を発表しているのであるが、本国の人の研究に比して寥々たる感が

しているのが現状である。

（四）

これまで述べて来たように、日本人は、江戸時代から今日に至るまで、李退溪の研究を行ってきた。しかし現代は欧米の科学的合理主義文化一辺倒の時代になって、李退溪ばかりでなく、古典など過去の文化に対して非常に冷たいものがあるが、それでも混迷した現代文明を救うものがあるのではないかと、研究する者は絶えることなく、精進している。そしてそこには、研究に値するものがあると感じて行なっているのであるし、李退溪研究についてもそれは言えるのである。それなら李退溪の思想のどこに意義があるのだろうか。

それを考えるときに、江戸時代の儒学者が、一番感銘を受けたものはどの書であったかを見る中に、示唆するものがあるのではないかと考え、そこから見ていきたい。

前述した江戸の儒学者の言葉の中に出て来るものを拾うと、その書は『朱子書節要』と『自省録』である。ところで、『朱子書節要』は、朱子の残した彪大な書簡から、退溪が重要と思うものを抄出して約三分の一にしたもので、初学者ばかりでなく、朱子の思想を学ぶために要領を得た

ものと言えるが、これはあくまでも朱子を学ぶためのもので、李退溪の思想を学ぶには、必ずしも適しているとは言えない。李退溪本人の手になる、本人の文が求められるのである。そこで『自省録』こそ、それに適したものであることが分かる。

『自省録』は、李退溪が門人・知友に与えた書簡の中から、自分の反省材料になるもの22通を選び出したものである。識語の日付の嘉靖戊午（三十七年・1558）からすると、退溪五十八歳の時に選んだ事が分る。退溪自ら反省材料にするものだけに、退溪の考えをよく表し、また自身がそうありたいと考えているものであるだけに、江戸時代の我が国の学者が読んで、心に銘じるものがあつたのは、(一)の章で述べたものからでも分るのである。

そこで江戸の学者が問題にした文を少し摘録しながら検討することにする。先ず『自省録』をみると、開巻第一書である「南時甫に答える」に、

心気の患は、正に理を察すること未だ透らずして、鑿空して以て強ひて心を操ること方に昧く、而して苗を握きて以て長ずることを助くるに縁りて、覚えず心を勞し力を極めて以て此に至る。

とある。この頃、南時甫（彦経）は、「学を為し理を窮むること太だ幽深玄妙に涉り、行未だ矜持緊急なるを免れず」

とあるように、学問に邁進しながらも、自負心のために自分の学問の進み具合がはかばかしいかない上に、政治上の禍患（党派の争い）が加わって精神的に参って病氣になっていた。それが心気の患で、今で言うノイローゼであろうか、この病に対して退溪は治療の薬（方法）として次のようなアドバイスをしている。それは君（南彦経）が、次のことを理解することだと述べる。

第一、須らく先づ世間の窮通得失、荣辱利害を將て、一切これを度外に置き、以て靈台（心）を累はさざるべし。既に此の心を弁得せば、則ち患ふる所、盖し已に五七分は休歇せん。（『自省録』）

と述べて、俗世間の評価する「窮通得失や荣辱利害」を度外視することで精神的なストレスから解放されれば、大半は治ると言い、次には、

凡そ日用の間、酬酢を少なくし、嗜慾を節し、虚閑恬愉にして以て消遣せよ。（同前）

と述べて、日頃から人との応待を少なく、また欲望も節して、心静かに、恬淡とした態度で日を過し、そうした後に、読書、草花の観賞、深山溪谷で魚鳥の楽しみのある処では自然に従い、常に心を順境に置いて樂觀的に考え、怒りの心を起こさないようにせよという。読書も、心を苦しませるような、また多読を誇るような、量を競うようなこ

とをせず、自分の心に素直に従って味わい、そして悦べという。つまり次のようなことをするのである。

須らく日用の平易なる処に就いて看破し熟せしめて、優游其の已に知る所に涵泳すべし。

ここに退溪の基本的な考えが出ている。ここに日用の平易な処という、つまり日常の平凡な生活の中に求め行うことである。同じく南彦経に答えた次の書にも、

此の理、日用に洋洋たる者の、只だ作止語嘿の間、彝倫応接の際に在り、平実明白、細微曲折、時と無く処と無く然らざること無し。
(同前)

とも述べる。ところが初学者は、この日用の平実明白を捨てて、高深遠大を図ろうとするが、それは間違いだということである。また「鄭子中に答ふ」(第二書)の中で、

盖し嘗てこれを聞くこと古人の学を為す所以の者は、必ず孝悌忠信に本づき、次を以て天下万事、性を尽し命に至るの極に及ぶ。盖し其の大体、包ねざる所無し。而して其の最も先に、最も急なる者は尤も家庭唯諾の際に在り。
(同前書)

と述べ、同じく「鄭子中に答ふ」(第五書)にも、
家庭日用の事の如きは、則ち大本を立て専一に功を用ふる所以の地に非ざること無し。
(同前書)
と述べるように、日用、家庭の語があるが、同様の言はあ

日本における李退溪研究と現代的意義について

ちここに散見する。

さて、朱子学での修養法は「居敬」と「窮理」である。この居敬の敬を朱子は「敬の字の工夫は、乃ち聖門の第一義」(『朱子語類』卷十二)と言うが、そのもとになったのは程伊川の「主一これを敬と謂ひ、無適これを一と謂ふ」(『敬はただこれ己を持するの道』(ともに『程氏遺書』卷十八)で、程子の弟子の謝良佐は「敬は是れ常惺惺の法」(『上蔡語録』)という。これらをもとに朱子は「敬とは主一無適の謂なり」(『論語集註』学而篇の注)と言っているのを受けて、李退溪は次のように述べる。

程子曰く、「道に入るは、敬に如くは莫し」と。明道字を写すの時甚だ敬す。固より字の好からんことを要むるに非ず、また字の好からざらんことを要むるに非ず、ただ字を写すに敬するのみ。字の工拙は、其の才分・工力に随って、自ら就す所有るのみ。

(同前書、答金惇叔)
退溪は、程子の「道に入るには敬が最も大切である」という言葉を引いて、程明道が字を書くときにはただ一心に字を書いていて、書く字の巧拙はその人の才能や技術によっているだけなのでそれには拘われないで、ただ其の行為に専一になること、この一が敬なのだとし、続けてこの文の後に、馬に乗って道を行く時には、その状況を見て詩を

詠じることも敬であり、読書するときには読書に、着物を着る時にはその着物を着ることに、身心が接するそのまゝで、雑念を入れずに身を謹むことが敬であると言う。そしてまた「鄭子中に答ふ」の第四書にも、

ただ能く黙黙として工を加へて、前に向つて已まず、積習すること久々にして純熟に至れば、則ち自然に心と理と一にして、随ひて捉へ、随ひて失ふの病無し。

程子曰く、「学は習ふことを貴ぶ。習ふこと能く專一なる時、方に好し」と。また曰く、「整斎嚴肅なれば、則ち心は便ち一なり。一なれば則ち自ら非僻おかの干すこと無しといふ者は、正にこれを謂ふなり」と。……ただ平日の莊敬涵養の功、至りて人欲の偽り、以てこれを乱ること無ければ、則ち其の未だ発せざるときは鏡のごとく明らかに、水のごとく止まりて、その発するときは節に中らざること無し。 (同前書)

と、程子と朱子（後者）の言葉を引用しながら、日常卑近な生活において、身を整斎嚴肅に、心を專一にして修養することを敬と考えている。弟子鄭子中の悩みも、日常生活における心の持ち方、即ち敬を涵養することで大本を立てることで解決することを退溪は説いている。

『自習録』^{*25}には、この他に、学問論、教育論、理氣論等^{*26}が論じられているが、ここでは現代社会に裨益するものと

して、日用性の中から敬についてのみを取り上げた。敬については、『聖学十図』^{*27}からも論じられている。

今日、人は愛についてはよく語り、よく論じているが、敬については、敬語が乱れているというようなことは言われるものの、礼の形式化の中で忘れられている状況にある。他に対する自己主張はあっても、自己に対する反省が忘れられる中に、敬の心も失なわれている。このようなことが要因となつてか、親子関係など家庭での問題から、学校での教育上の、また社会で問題となるような事件まで起きている。

このような問題を考える時、識者はやたら高度な議論を展開し、科学的な分析や心理学の応用から説き、それを一般の人はそれらを尊重するが、日常性を離れて人間の社会は成り立たないことを考える時、まずは李退溪の説くように、卑近な日常から始まらなければならないのである。

『論語』にも、「今の孝は是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふこと有り。敬せずんば何を以て別たん」（為政篇）とあるように、「敬」の心がなかったら、動物と何処に区別があるうかとある。その「敬」する心を失った現代に、李退溪の思想を学ぶことから、謹んで敬する心を取り戻すことが李退溪研究の現代的意義の一つであろう。

(註)

- *1 松田 甲 「自省録と朱子書節要」(『日鮮史話』第六編、P 24)
- *2 阿部吉雄 「林羅山と朝鮮儒学」(『日本朱子学と朝鮮』第一編第二章、P 202)
- *3 松田 甲 『日鮮史話』『続日鮮史話』(昭和51年5月、復刻。原書房)
- 阿部吉雄 『日本朱子学と朝鮮』(昭和40年3月、初版。昭和46年10月、2刷。東京大学出版会。同『李退溪——その行動と思想——』(昭和52年9月、評論社)
- 友枝龍太郎 『李退溪——その生涯と思想』(昭和60年8月、東洋書院)
- *4 阿部吉雄 『日本朱子学と朝鮮』P 238。
- *5 同右書、「李退溪尊敬の事例」P 455。
- *6 拙稿、「李退溪と佐藤直方の敬説について」(第9回韓・日・中退溪学国際学会、会誌P 32—45。
- *7、8 注5に同じ。P 462、463。
- *9 巖 錫仁 「理気論にみえる崎門学派の思想的位置」(『日本思想史』No. 56、P 90。)
- *10 海老田輝巳 「三宅尚斎と李退溪」(『退溪学論叢』創刊号、1995・8)この後に、第8回大会に「三宅尚斎と留守希斎の儒学思想」(1995・8)(『退溪学論叢』第3輯、1997年所収)がある。

- *11 松田 甲 「村士玉水と『李退溪書抄』」(『日鮮史話』第6編)
- *12 松田 甲 「日本朱子学者の李退溪観」(同右書、P 107、108)
- *13、14 楠本正継 「大塚退野ならびにその学派の思想」(『熊本実学派の研究』昭和32。『楠本正継先生中国哲学研究』国士館大学付属図書館、昭和50年3月。所収)
- *15 岡田武彦 「楠門学与李退溪」(『江戸期の儒学——朱王学の日本的展開』昭和57年11月、木耳社。所収)他に福田 殖「李退溪と崎門学者楠本碩水」(『文学論輯』第34号、昭和63年)がある。
- *16 松田 甲 「薩摩の大儒学赤崎海門」(『日鮮史話』第1篇、所収)
- *17 松田 甲 「自省録と朱子書節要」(同右書、第6編、所収)、阿部前掲書、P 478、479。
- *18 注12に同じ。
- *19 『日鮮史話』は第1巻、第1編、第2編、第2巻、第3編、第4編は大正15年に書かれ、ともに昭和2年に刊行。第3巻、第5編は昭和4年、第6編は昭和4、5年に書かれ、刊行された。
- 『続日鮮史話』の第1編は昭和5年に、第2編、第3編は昭和6年に書かれ、同年刊行された。本書は長らく絶版となっていたが、昭和51年8月に、原書房からユーラシア双書25として復刻された。この後に、高橋亨の「李退溪」

が『斯文』巻21、22（1939—1940年）に5回にわたって連載されている。

*20 昭和19年、文教書院刊。（日本教育先哲叢書第23巻）

*21 阿部吉雄先生の業績目録は、『実践国文学』第14号（昭和53年10月）所収。本号には先生の遺稿「李退溪の哲学的修養学と日本の儒学」も収められている。

*22 『退溪学報』に載った日本人の論文は、退溪学国際学会で発表されたものである。

佐藤 仁 「李退溪と李延平について」（第62輯・1989年）

佐藤 仁 「李退溪と『心経附註』」（第68輯・1990年）

本論は、「李退溪研究（一）——李退溪と『心経付註』——」として、「久留米大学文学部紀要国際文化学科編」（第9・10号、1996年）に収められている。

福田 殖 「李退溪の『自省録』について」（同前書）

小川晴久 「李退溪にとっての山林生活の意味」（第75・76輯、1992年）

佐藤 仁 「李退溪の自然尊重の精神について」（同前書）

高橋 進 「李退溪哲学における自然と人間のエコロジ」（同前書）

佐藤 仁 「退溪と宋儒の自然尊重精神」（第81輯、1994年）

小川晴久 「李退溪と山居」（第87・88輯、1995年）

高橋 進 「退溪学の未来」（同前書）

*23 『退溪学論叢』に掲載されている関係論文を挙げると次の通りである。

創刊号、1995年5月。

猪城博之 「退溪学の受用の二つの道」

海老田輝巳 「三宅尚斎と李退溪」

福田 殖 「李退溪の学問と日本文化への影響」

難波征男 「李退溪と日本の儒学」

第2輯、1996年7月。

猪城博之 「李退溪の『聖学十図』における「敬」の諸相」

佐藤 仁 「退溪心学の一断面」

福田 殖 「退溪学の社会的役割」

第3輯、1997年6月。

海老田輝巳 「三宅尚斎と留守希斎の儒学思想」

福田 殖 「李退溪『自省録』の今日の意義」

第4輯、1998年6月

難波征男 「退溪学と横井小楠の「学校論」」

疋田啓佑 「李退溪と佐藤直方の敬説について」

藤原静郎 「朱子学の読書論——朱子から退溪へ」

第5輯、1999年6月

海老田輝巳 「李退溪の詩における朱子と陶淵明の影響」

第6輯、2000年6月

牛尾弘孝 「朱子学の日本的受容」

難波征男 「李退溪と書院教育」

*24 拙稿「日本の退溪学継承の様相」（『退溪学』第九輯、

1997年12月、安東大学退溪学研究所、所収）

*25 福田 殖 「李退溪の『自省録』について」（『文学論輯』第36号、平成2年）

*26 「答黄仲举論白鹿洞規集解」、「答奇明彦四端七情分理氣

弁第一書」がある。後者は、阿部吉雄編著『朝鮮の朱子学（上）』の李退溪の項の文に、全文が収められており、書き下し文、註、要約がある。

*27 高橋 進 「李退溪と敬の哲学」第6章、第7章を中心

に論じられている。また阿部前掲書（注4）
P 372。

猪城博之 「李退溪の『聖学十図』における「敬」の諸

相」（『退溪学論叢』第2輯）。

『聖学十図』は阿部吉雄『朝鮮の朱子学と日本の朱子学』
の李退溪の項の文に、全文の書き下し文、注、要約がある。
P 64―95。

本論文の骨子は、中国、武夷山の朱熹研究センター主催の
「朱子と21世紀国際学術研討会」の一翼を担う「韓日中退溪学
国際学会」に於て発表したものである。

付記 本稿出稿後、「韓国伝統文化と九州」（日韓シンポジウ

ム）が2000年12月10日、九州大学国際ホールに於て、九州大
学韓国研究センター主催で開催され、福田 殖久留米大学
教授による「李退溪と九州の朱子学者——大塚退野と楠
本碩水」が報告された。（『資料集』P 52―58）

日本における李退溪研究と現代的意義について